札幌大学総合論叢　第九号（二〇〇〇年三月）

〈創作〉

舞踊詩劇『サロルンチリ
――丹頂鶴の舞い――』

原子　修

幕あいてすでに暗黒
シンセサイザーの音楽めざめる
やがて野の中心にくっきりとうかびあがる卵形の光の輪郭
その底にうずくまる幼いサロルンチリ
合唱団の神秘のハミング　しずかにたかまる
とつぜん空を裂くコロラチュラソプラノの絶唱
どっとオーロラの光しぶき
やがて
いちわの透明な鶴が空いっぱいに舞う
声
「さあおいで　サロルンチリ……うつくしい舞いの世界へ」
サロルンチリ　卵形の光の輪郭いっぱいに立ちあがり　声の方に手をのべ　苦しみもがき絶叫する
「おお　幻の鳥！」
やがてオーロラの光ついえ
幻の鳥の舞いもうせ
合唱団のハミングも消滅し
卵形の光の輪郭の中で手をのべたまま凍るサロルンチリ
群唱団
「みてしまったな　サロルンチリ……じゃあ　おまえの一生は　きまった
幻の鳥を追って　さあ卵の殻の外へ　でていくがいい」

サロルンチリ　するどい嘴で卵形の光の輪郭を突き破る
卵の殻のうちくだかれる硬質な音
群唱団
「おお　コンクリートよりも固い卵の殻をすかして　幻の鳥の舞いを手にとるようにみてしまった異能の丹
頂鶴が　いま　うまれでる
おそろしい闇の胎(ハラ)から鬼子のようにまばゆい光の子が　いま　うまれでる」
卵形の光の輪郭　みるみる崩壊し
たからかなファンファーレとともに　サロルンチリ　どっと　外界にまろびで
全世界が　パッと　あかるく照り映える
父鶴
「おお　ヒナがかえったぞ……じぶんの力で　ぶあつい卵の殻をつき破り」
母鶴
「目が金いろだわ　金目の丹頂鶴だわ」
サロルンチリをかこんで　父鶴と母鶴　歓喜の踊りに熱中する
弾み鳴る舞曲
バリトン
「コー」
ソプラノ
「クワックワッ」
バリトン

「コー」
ソプラノ
「クワックワックワッ」
バリトン
「うれしやの」
ソプラノ
「いとし子のうまれしは」
バリトン
「たのしやの」
ソプラノ
「金目の鶴のうまれしは」
バリトン　ソプラノ
「野には　虹……空には太陽……うれしやの」
バリトン
「コー」
ソプラノ
「クワックワッ」
バリトン
「コー」
ソプラノ

「クワックワックワッ」
突然　舞曲やみ　暗転
残酷な金属音
群唱団
「おお　きらめく純金の目こそは　度し難い狂気の宿か
サロルンチリが　すぐ後で卵からかえった妹鶴を突き殺そうと必死に追いまわす」
真紅の光はげしく回転
サロルンチリのシルエット　妹鶴のシルエットを追いまわす
妹鶴
「(必死に) どうしてなの　お兄さん！」
サロルンチリ
「(絶叫して) 幻の鳥がぼくをよんでいるんだ
ああ　うつくしい舞いの世界！」
妹鶴
「わたし　お兄さんの邪魔など　けっしてしないわ」
サロルンチリ
「(泣き叫び) ああ　ゆるしておくれ　おまえのいじらしさは　ぼくの目から幻の鳥をみえなくするつい立て
……おまえのかわいさは　ぼくの目から幻の鳥をけしさる目つぶし……」
妹鶴
「わかったわ　お兄さん　わたしを食べて　すっかりむさぼって　わたし　お兄さんのはらわたや皮にとけ

入ってお兄さんそのものになるわ」
妹　サロルンチリの足もとに身を投げだす
サロルンチリ
「（絶叫して）おお　幻の鳥！」
暗転
群唱団
「サロルンチリがむさぼり食べたのは　妹鶴のういういしい肉と骨に形象された愛か……おお　大原野のむごたらしい愛」
ワーッと歓声あがる
明転
快活な音楽
群舞団　手に手に　原野の花をふりかざし
サロルンチリをとりかこんで　陽気に踊る
合唱団
「春だ　パイカラ
キタヨシの
湿原に
みどり萌え
春だ　パイカラ
水ぬるみ

蝶は舞い
われらの
春だ　パイカラ」
にわかに切断される音楽
不吉な明滅光
宙を切る甲高い金属音
群唱団
「空のたかみからナイフのようにオジロ鷲が襲ってくるぞ！」
群舞団　ちりぢりに逃げさる
無心に舞うサロルンチリ
母鶴
「サロルンチリ！」
父鶴
「（なおも舞うサロルンチリの方へと駈けながら）妻子の危急の谷に救いの橋を架けるのが主（アルジ）のつとめ」
母鶴
「（手をのべ）あなた！」
暗転
群唱団
「オジロ鷲は　鉄の爪と鋼の嘴をもつ大原野の王……それに挑みかかった父鶴の最大の武器は　妻と子を守ろうとする父性愛の鉾……勝敗は闘いの前にすでに決まっていた

（六九）

しかし　父鶴は舞いあがり　オジロ鷲にたちむかった
血が　父鶴の生涯の夕焼けを刷き　真紅にそまった羽毛が断末魔の花びらを散らした（ステージが夕映えの光にそまる）
二羽の鳥がもつれあって　西の空に姿をけすと　湿原に　血よりも赤い夕焼けがすすり泣いた……もはや二度とかえってくることのない父鶴をいたむかのように」
悲嘆の音楽　身をおこす
夕焼けの光の底に立ちすくむ母鶴とサロルンチリ
逆光にシルエットを焼きつける母鶴の　ひろげたつばさから　一枚一枚　羽根毛が散る
母鶴
「（悲痛に）天よ……なぜ！」
群唱団
「ひとつの不幸はすぐさまべつの不幸をよびたして徒党をくみ　ひとつの不運はすかさずもっと多くの不運を招きよせて気勢をあげる
気をつけるがいい　母鶴よ
古い風切羽根がぬけおちて　あらたな羽根毛かわる換羽の時がやってきた
しばし　空を飛べない鶴として　地を這いずるばかりの時がやってきた
さあ　母鶴よ
背よりも高くキタヨシの生いしげる湿原の奥にひっそりと身をかくし　幼ないサロルンチリの成長を待つがいい
夫を失ったいまは　おまえじしんの賢こさのみが　おまえの夫……」

音楽　わかわかしくはずむ
明転
華れいな羽根をひるがえして舞う蝶
それを追い　ともに舞うサロルンチリ
サロルンチリ
「蝶さん　なぜ　あなたの舞いは　光のしずくから自由自在に色をつむぎだすダイヤンドのように華麗なの？」
蝶
「わかんない　でも　どうして？」
サロルンチリ
「ぼくもあなたのようにかろやかに舞えたらなあ」
蝶
「わたしを食べてもいいわ　サロルンチリ
あなたの体をかりて　わたしは　いっ層かろやかに舞えるとおもうわ」
サロルンチリ
「ほんとう？」
蝶
「ええ」
暗転
むごい音楽爆発する

サロルンチリ

「（スポットの円光の中をひとり舞いつつ）食べるとは　なんて残酷なうつくしさなんだろう　かろやかな蝶が……敏捷な魚が……あでやかな花が　ぼくの胃袋に屠(ホフ)られて　ぼくの血のしずくをいっ層ルビー色につやめかし　ぼくの羽根をいっ層雪の純白に梳(ス)きあげる
ぼくは　竈(カマド)だ……蜻蛉を　バッタを　蛙を　蛇を　鮒をのみこんで　生命の火にかえてしまう無惨な竈だ
おお　幻の鳥よ
この残酷な祝祭も　あなたが　うつくしい舞いの世界へと　ぼくをさし招くのが原因　（おのれの姿をみかえし）それにしても　なんて　ぼくは　幼なく　醜いのか
よろよろ枝を折ってつくった棒杖のような脚……赤身の肌からブツブツと発芽してくる羽毛の芽……すっかり抜け切れずに未練がましくへばりついている茶褐色のうぶ毛……
ああ　湿原の女王とほめたたえられる母鶴のような美々しい姿に　ぼくがなる日はあるのだろうか」

暗転

明るい音楽鳴りしきる

明転

母鶴とサロルンチリ　手をとりあって舞う

母鶴

「サロルンチリよ　苦悩の蓬は口に苦く魂に毒　まして　おのれの成長をおのれが思い煩らうのは　神の役割りを盗みとる不遜な仕業　さあ　頭をたかくあげ　湿原無限立方の風を帆にはらんで　はれがましく　餌をついばみ　未来の空をのぞむがいい」

サロルンチリ

「（母鶴の手をはらい）所詮　ぼくの苦しみはぼくじしんの影　おかあさんの影とおなじ暗黒でできてはいても　ちがう原因からうまれたちがう結果　ああ　ぼくをひとりにして下さい　幻の鳥がぼくを招いています　ぼくは　一刻もはやく　幻の鳥の住むうつくしい舞いの世界に旅たたねばならない」

母鶴

「幻の鳥？」

サロルンチリ

「ええ」

母鶴

「それは幼いおまえの幻覚ではないの？」

サロルンチリ

「命あるものすべて　大地を平らだとおもい込む幻覚で生きているじゃあありませんか」

母鶴

「おお不幸な子……金いろの目をもって生まれついたばかりに　でも　おまえは　まだ飛べない鶴です　湿原のむこうの広い原にでていくのだけはおやめ　人間という空飛ぶつばさのかわりに悪事千里のさかしさをもつ無情なイキモノが　おもえを　鉄砲という卑劣な武器でうち殺そうと待ちかまえているのだから」

暗転

高速な音楽おこる

スポットの円光をひとり踊るサロルンチリ

「はしるってなんてふしぎなんだ　とまっているうちは一本の巨大な柱のように感じられた空気も　じつは

（七三）

いくえにも重ねられたむすうの花びらをもつ透明な薔薇一輪とわかってくる　その花びらを一枚めくるとすぐ　つぎの一枚があらわれ　つぎつぎとめくっていくと　ついには　花びらの深奥にひめられているはずの花心が強力な磁石のようにぼくをひきよせ　前進するというよりむしろ上昇するという感じがぼくを支配しはじめる……」

群唱団

「サロルンチリよ　いまおまえのつかんだ　スピードの高揚感こそが　舞いの扉……」

スポットの円光消える

高速な音楽やむ

全く反対側にスポットの円光あらわれ　その中心をひとり舞うサロルンチリ

水流の音楽おこる

サロルンチリ

「水のおもてに浮かぶって　なんてふしぎなんだ　はじめは大気の切り口のように光るばかりの水も　その上におのれの体をうかべ　水かきを張りつめた足を櫂のように漕いですすむと　いつしか　なにもないようにみえた大気の世界が　水との境界線を　透明でうつろいやすい一本の糸に紡いでいるのがわかってくる　その糸をたぐるように泳いでいるうちに　逆にその糸がぼくをたぐりよせはじめ　ぼくは　ぼくの体の重さからすこしずつ　ぬけだして　ふわりとかろやかになっていく……」

群唱団

「サロルンチリよ　いまおまえのつかんだ　雲のような浮揚感こそが　舞いの入口……」

不吉な音楽が金属的に鳴る

サロルンチリ

「（絶叫して）飛ぶのだ！　つばさをひらいて駈け　スピードの絶頂で水に浮くとおなじ感覚を花咲こう　それが空への舞いとなるのだ」
スポットの円光の中を駈けだすサロルンチリ
群唱団
「危ない　サロルンチリ　湿原をではずれた広野原のドロタモの木の蔭には　無残な密猟者の銃口が　ぴたりと　おまえの心臓に　照準をさだめているぞ」
母鶴
「（べつのスポットの円光の中をひたはしり）ああ　サロルンチリが飛びたつ練習にも　命をすてさるにも　ともにふさわしい広野原へと　真一文字に駈けだした　もうどんなにとめても　けっして戻るまい　よし　勝手知った湿原を先まわりし　わたしが密猟者の銃弾の的になろう」
急速な不安の音楽もつれ鳴る
スポットの円光の中をひたはしるサロルンチリ
それを先回りしてはしる母鶴の円光
一発の銃声
音楽やむ
母鶴　胸をかきむしって倒れる
サロルンチリ
「おかあさん！」
母鶴
「（あえぎつつ）わたしに近づいてはいけない　サロルンチリ　できるだけはやく　キタヨシの生い繁る湿原

（七五）

の奥に身をかくし　空へ飛びたつ日にそなえなさい」
母鶴　円光とともに消失
サロルンチリ
「(立ちすくみ　ついで　後ずさり　苦悩に顔をおおって泣き)　なんて残酷な！　幻の鳥よ　うつくしい舞い
へのあこがれとひきかえに　ぼくから　妹　父　そして　母を奪っていく」
サロルンチリ　無限の闇にまぎれこむ
暗転
地平線にうっすらと曙の光さしてそめる
すべらかな音楽うつくしく瀬々らぐ
ソプラノ
「ついに
いちわだけの
サロルンチリ
孤独な鶴に
湿原の
みじかい夏の
太陽が
ふりそそぐ
つばさに
くびに

まっしろい
光の花が
散りこぼれる」
奏楽やむ
明転
一転して華麗な音楽鳴りそめる
群舞団　夏の原野の花々を手に手にかざして踊りめぐる
サロルンチリ　その踊りの環の中心で　はばたき　駈け　躍動する
群唱団
「大気がほどけ
風がもえ
地に
緑の王冠はよろこび
空に
光の使者ははしり
キラキラキラ
宇宙のしずくははじけて
鶴は
心から
しられざる無限のかなたを

（七七）

あこがれ
のぞむ」
音楽しずかにやみ
群舞団踊りつつ去り
光ついえ
世界の中心をさすスポットの円光にサロルンチリひとり残る
サロルンチリ
「（まっしろいつばさを鮮やかにひろげ）時は　待つもの　変化は神にゆだねるのが一番　みよ　さしも醜く
いヒナの姿形も　いまは　跡形もなくうせ　つばさは雪よりもしろい風切羽に輝やき　脚もすべらかな線を
かなで　父鶴や母鶴に似てうつくしい鶴に成長はしたものの　おお　空へと舞いあがる力のないいまは　鳥
であって鳥ではない　おお　幻の鳥よ　われに　飛びたつ力を授けたまえ」
暗転
音楽リズミカルにおこる
野のはずれにスポットの円光がおち　その中心ではげしくはばたき舞うサロルンチリ
サロルンチリ
「はばたくうち一本のすきとおった光の縄が虚空にゆらゆらゆれているのが　みえてくる　いや　そればか
りか　光の縄の先端がしっかと鷲づかんでいるするどい鉤までが　ぼくの目の金いろの鏡に　まざまざとう
つしだされてくる　それでも　なお　はばたいていると　ぼくの全身が輪のようにほそまって　あ　空から
垂れさがる鉤に　ぼくの全身が　かちりと　ひっかかっていく……」
群唱団

（七八）

「サロルンチリ　その上昇感こそが　舞いの序奏……」
スポット消失
音楽やむ
野の反対側にスポット落ち　その円光を踊るサロルンチリ
べつの音楽うきうきとおこる
サロルンチリ
「（はばたきはしって）いよいよあきらかだ　いくえにもかさねられた透明な花びらの薔薇一輪としての空気のその花びらをいちまいずつめくっていくと　ついには　地上のものではない花びらだけの世界へとのめりこんでいく　ああ　それが　飛びたちなのだ　のめりきって　おちきって　地面のいましめをぬけ　にわかに体がかるくなる　そのとき　ぼくは　虚空の縄の鉤に　カチリとひっかかる光り輝やく環となって　宙に浮かびあがる！」
群唱団
「ついに　時は来た　サロルンチリ　力づよいはばたきの上昇感を　水平方向にいざなってひたはしり　スピードの高揚感と水に浮く浮揚感がはげしく結婚する一瞬　あらたな力がうまれいで　若い丹頂鶴よ　おまえは　舞いあがって　空と一体になるのだ」
スポット消失
暗黒
音楽やむ
沈黙
地平線をはげしく焼く曙光

（七九）

サロルンチリの声
「つばさは　純白の扉のようにひらかれた
天よ
われをうけ入れたまえ
つばさいっぱいに風を頬張ってはしると
ついに
虚空の縄が……その先の鉤がみえてくる
そのとき
すでにぼくは光り輝く環となって
あ
疾走するスピードが
ふわりと浮く力をよびさまし
つばさの下にたぐりこまれた空が
はてしなく
ぼくをあしあげ
ぼくは
飛ぶ
かぎりない虚空のふかさをおしはかる光の錘となって
ぼくは
飛ぶ」

合唱団のハミングうつくしくおこる
ますますあかるむ空をしずかに舞いとぶサロルンチリ
音楽もえそめる
合唱団
「舞いは
花
うつろな空に
咲きほこる
一輪の
風の
花
はかなくも
時よ
うつくしく……」
音楽やむ
サロルンチリ
「（ゆるやかに舞い）飛びあがって　はじめて　空のはてしなさが　わが身のものとなった　高みの上にはべつの高みが……低みの下にはべつの低みが……広がりのかなたにはべつのひろがりがひそんでいて　宇宙がすべての一点からはじまってまたそこで終る永劫の球なのだとわかってくる
それにしても　空の高みから見下ろす地上は　なんてひらべったい色彩のキャンバスなのか　キタヨシの大

湿原は　刃金のように光る水流を　緑の肉体にちりばめ　銀の蛇のようにうねる大河のはては　雲母のしとねをびっしりと敷きつめた湖水が　まばゆい鏡をなめす
そして　岸辺に　あれ　まっしろい鳥の影が！　鶴だ　丹頂鶴だ　おお　なつかしいはらから　一刻もはやく舞いおり　鶴の群れに身を投じて　ながかった孤独のくるしみをいやそう」

暗転

不吉な音楽鳴る

群唱団

「気をつけよ　サロルンチリ　おまえは　どんな風景をもまばゆい黄金の宮殿にかえてしまう金目の鶴……
しかし　黒目や茶目の並みの鶴にとって　おまえは　ときに　異端者　とりわけ　気の荒いひとりみの若い鶴たちの群れは　ときに　異端のものを突き殺すというではないか」

暗転

若い鶴たち　一羽を除き　サロルンチリをとりかこんで　なぶり　小突き　あざける

若い雄鶴1

「やい　鶴の姿をかたる家鴨の肉豚野郎　なんてえ　不様な　いまの着陸ぶりだい？　よたよたおろおろバッサバサ　まるで　つばさをボンドで背中にくっつけたヨークシャ豚が　天国の崖からおっこちてきたみてえに　騒々しくってよぉ」

若い雄鶴2

「やや　こいつ　飛び方をけなされて　女女しくも　涙ぐみなさってござるよお　おわけえの　ジャリンコちゃん　おったかくとまりなすって　ご返事もできねえ　しらんぷりぷり　ミザルキカザルイワザルモンキーの猿知恵お鶴たあ　てめえのことか」

若い雄鶴3
「尻(ケツ)の毛パヤパヤケッケッケ　鶴の屁ポヨポヨヘッヘッヘ　かわいいかわいいベイビィちゃん」
若い雄鶴1
「首にや　うぶ毛の茶色いフカフカマフラー巻いちゃって　発育不良未熟児グループの優等生づらおったて　内心寒気のゾックゾク」
若い雄鶴2
「ホ　ホヨホヨヨ　こいつめ　金目　金目ピカピカ　金目の鶴だ」
若い雄鶴3
「畜生！　黒目黒茶目っけのおれ達を裏切りやがった　外人め　異民族め」
若い雄鶴1
「丹頂鶴の名をたばかるもぐりのゴジラ鶴め」
若い雄鶴たち
「ぶっ殺せ！」
若い雄鶴2
「金目の鶴は　災いのもと」
若い雄鶴3
「さあ　みんなで　災いのもとを断ち切ろう」
サロルンチリ
「(必死に) 待ってください　ぼくは……」
若い雄鶴ら　かまわず　突きかかる

すこし離れて静観していたいちわの雌鶴　すばやく　間に入って制する

若い雌鶴

「お待ちよ　みんな　わたしがこのヒナ鶴の身元を確かめるのを邪魔したらゆるさないよ　（サロルンチリに）ねえ　あんた　もしかして　この湖の西の方の湿原のうまれでは？」

サロルンチリ

「ええ」

若い雌鶴

「（駈けよって）あんた　もしかしてサロルンチリというのでは？」

サロルンチリ

「（驚ろき）えっ　どうして　ぼくの名を？」

若い雌鶴

「（抱きしめ）おお　わたしのかわいい弟鶴！　春に　父鶴と湖のほとりで会った折　おまえのことをぜんぶ聞いたよ」

サロルンチリ

「で　あなたは？」

若い雌鶴

「わたしは　昨年の春　あなたとおなじ湿原で　おなじ父鶴と母鶴のもとにうまれた　いまはひとりみとなってさすらう姉鶴」

サロルンチリ

「おお　お姉さん！」

二羽の鶴　かたく抱きあう
若い雄鶴ら　二羽からはなれる
若い雄鶴1
「ちえ　運のいい小僧奴　おれ達の嘴に串刺しされて　ジュウジュウ焼き鳥バイキング料理に格上げされるはずだったのに……」
姉鶴
「（きっとなって向き直り）お黙り！　おなじ父親の精子と母鶴の卵子の結合からうまれでたわたし達は　一年という時間のずれをたがいに背負いあう一身同体――だから　弟鶴へのあなどりは　わたしへのあなどりそして　湿原の神とよばれるわれら丹頂鶴全体へのあなどり……だから　鶴でありながら鶴をあなどる鶴は鶴の一族全員の嘴に突き殺されても仕方ない鶴だわ」
若い雄鶴2
「わかったよ　姉御」
若い雄鶴ら去る
姉鶴
「（サロルンチリを抱きしめ）サロルンチリ　わが弟　金目の鶴は神の使者というわ　さあ　きょうの出会いのよろこびを　ともに舞いましょう」
音楽わきおこる
スポットの円光の中をたおやかに舞う二羽
突然　奏楽やむ
サロルンチリ

「（姉鶴からはなれ）やっぱり　ぼくはいかなければなりません」

姉鶴

「えっ　どこへ　サロルンチリ」

サロルンチリ

「北から　幻の鳥が　ぼくをよんでいます　そこには　きっと　うつくしい舞いの世界が　ぼくを待っているはずなのです」

姉鶴

「まあ　サロルンチリ　でも　もう秋　北にいくほど　寒さはつのり　餌はとぼしくなるわ　そろそろ　わたし達も　凍らない川の瀬々らぐ南の方にうつり住むつもりです　そこには　凍らない心をもつやさしい人間達がいて　鶴に餌をまいてくれるのです」

サロルンチリ

「でも　ぼくはいきます　きょうはじめて　空高く舞い上がったとはいえ　さっきのような不様な舞いおり方を嘲けられ　ぼくはふかい傷を負いました　しかし　その傷をいやす薬は　舞いの上達だけです」

姉鶴

「だれしも　はじめは　嘲けられるわ　でも　だれしも　いつしか　巧みに舞い飛んでほめそやされるようになるわ」

サロルンチリ

「（二つに割れていくスポットの円光の一つの中を舞いつつ）さようなら　お姉さん　ぼくの道をあゆむのは　ぼくです」

姉鶴

「（遠のいていくサロルンチリにつばさをのべ）サロルンチリ　金目の鶴にうまれついたのが　おまえの　幸運の星か　不幸の闇か　おお　わたしにはわからない」

音楽おこる

暗転

群唱団

「大白鳥までが　うるみわたる水と　みずみずしい餌をもとめて南下する秋……サロルンチリばかりは　はるか北　寒む寒むと凍える空を　身もちじむおもいで遡った」

スポットの円光の中を　ひとり　はげしく舞うサロルンチリ

鳴りしきる奏楽

群唱団

「やがて　とおい北の海にみなしごのように浮かぶ島で　サロルンチリの　きびしい錬磨が　はじまった

島の奥の　水が湧きでて年中氷らない沼を宿り場としてサロルンチリは　舞いに熱中した

虚空の一点におのれをピンで留めてしまうかのようなアジサシの停止飛行……はげしくはばたいて一気におのれを空へと釣り上げるカモの上昇飛行……上昇気流の手のひらにおのれをゆだねきるトビの旋回飛行……

そしてときには海底ふかく潜入するウミウの水中飛行が　サロルンチリに　舞い飛ぶ術（スベ）の奥深く華麗な扉をひらいた

つばさも凍る空の　酸素に乏しい高みへと旋回上昇し　ときには　わだつみの底ふかくかいくぐった

鶴にはあるまじきこれらの試みが　かえってサロルンチリの舞いの優美さを極限へと追いつめ　研ぎ　磨きつよめ　いつしか彼は　凍てつく北の空に　うつくしい舞いのフォルムを　描いては消し　消しては描くすぐれたアーチストだった」

音楽にわかにやむ
凶兆をつげる不気味な音響鳴りそめる
暗黒の鳥オジロ鷲　サロルンチリの円光に闖入し　二羽の鳥もつれ踊る
光はげしく明滅
群唱団
「オジロ鷲だ！」
オジロ鷲
「わしは　北の空の王者……ふぶきの爪をひらき　氷の嘴ふりかざして　寒さの世界に君臨するもの」
サロルンチリ
「ぼくは　おのれの心の空の王者……火よりも熱く飛び　水よりも透明に舞い　風よりもすばやく馳せ　沈黙の世界に音楽となって君臨するもの」
オジロ鷲
「生意気な！　王者のわしにさからうのか」
サロルンチリ
「おまえが　ぼくのゆくてに　崖からころげ落ちた石となって立ちふさがっているだけのことさ」
オジロ鷲
「畜生奴！」
二羽の鳥　はげしくいさかいあう
群唱団
「オジロ鷲は猛禽だった　するどい爪が　サロルンチリの羽毛をひきむしり　必殺の嘴がサロルンチリの首

を噛み切ろうとした」
やがて　スポット二つに割れ　サロルンチリ　かろうじてオジロ鷲の攻撃をふり切る　それを追うオジロ鷲の
スポットの円光
群唱団
「息絶え絶えにサロルンチリは　旋回上昇し　ついに　どんな鳥もけっして辿りつくことのない　骨まで
凍って脆く砕け散らんばかりの高空へと　のがれでた
追い迫るオジロ鷲は　やがて　高空のしかけた　酸素の稀薄さという罠にはまって　目の先がまっくらにな
り　むなしく投げすてられた紙屑のように海へと落ちていったが　一方　サロルンチリも力をつかいはたし
てしまった
うすれていく意識のかぼそい糸を頼りに　血まぶれの鶴は　凍傷に噛みしだかれたつばさを必死に張って
風のゆるやかな勾配を　南にむけてすべりはじめた」
この間にオジロ鷲のスポットの円光ついえ　サロルンチリ苦しみあがきつつ舞い踊り　動きがゆるみ　ついに
力つき　地に伏す
群唱団
「手のひらのつめたいものは心があたたかいというが　北の風もそうだった　つめたくすきとおった手のひ
らに瀕死のサロルンチリをのせると　はるか南　彼の生れ故郷のさらに南の　凍てつく原野の一隅へと　な
ん時間もかけて　ゆったりと　運び　琥珀にいろづくキタヨシの枯れた茂みに　そっとおろし　音もなく立
ち去った
だが　一難去ってまた一難
飢えタハシブト鴉やキタキツネが　いまは飛べないサロルンチリをむさぼり食べようとにじり寄る……」

（八九）

スポットの円光の中のサロルンチリを狙って　闇から円光のヘリへと暗舞するハシブトガラスとキタキツネ
の不気味な踊り
災厄をつげやまない音楽
バリトン
「北の
荒野(アレノ)に
凍えはて
消えなんとする
命の
灯(トモシビ)
いずこ」
襲いかかろうとするハシブト鴉の群　それを追い散らすキタキツネ　逆襲するハシブト鴉の鋭い群　ついにキ
タキツネ断念して去る
不協和音のはげしい交錯
光の明滅
ハシブト鴉の群　どっと　サロルンチリの円光になだれこむ
姉鶴
「サロルンチリ！」
すばやく移動するスポットの円光の中を息せき切ってはせよる姉鶴　まつしろい飛影をうつくしくひるがえし
ハシブト鴉の群に踊りこみ　群を裂き　四散させる

（九〇）

静寂
姉鶴　ひざまづき　サロルンチリを抱きおこす
悲痛な音楽おこる
ソプラノ
「いとしいものよ
つばさは
氷り
月はかすみ
苦しみのはてに
なお
うつくしい舞いを
夢みる」
音楽低く鳴る
群唱団
「愛しあうものどうしは　つよくひきあう二つの電極……北の空から瀕死の鶴が吹きよせられた　との風の便りに　もしやサロルンチリでは　と　心のさわいだ姉鶴が　羽ばたきももどかしく弟鶴をさがしあてたのは　ひとつの幸運ではあったが　もはや飛ぶ力のないものをかばって　死の原野にふみとどまる決心をかためたのは　ひとつの悲運ではあった」
サロルンチリ
「（意識をとり戻し）あ　お姉さん　なぜ　ぼくとあなたが　いま　ここに」

姉鶴
「（いっそうつよく抱きすくめ）うれしいわ　ついに薔薇いろに染まった意識の曙が　サロルンチリを　無意識のくらい夜からすくいだしたわ」
サロルンチリ
「お姉さん　あなただったのですね……死のつめたさにかたく凍っていたぼくの肉体を　あなたじしんの肉体の熱で　もとの仄暖いししむらに凱旋させてくれたのは……」
姉鶴
「弟への愛が　わたしに　燃えさかる太陽へとかえる術（スベ）をさずけたのです」
サロルンチリ
「じゃあ　姉への愛は　ぼくに　澄み切った空へとかえる術（スベ）をさずけます　さあ　お姉さん　一刻もはやくぼくをすてて　この危険な荒野から飛びさってください　でないと　ぼくのつばさの骨と筋肉を嚙みくだいたとおなじ　あの　どん欲な寒さのやつが　こんどは　あなたに襲いかかって　ぼくとおなじ飛べない鶴にしてしまいますよ」
姉鶴
「サロルンチリ　おまえがそういえるのも　わたしが　おまえのそばで　ハシブト鴉どもを追いはらっていればこそ」
サロルンチリ
「でも　こうして　ぼくのそばにいる限り　あなたは　いずれ　飢え　凍え　ついには　ぼくとおなじように　ハシブト鴉の餌食となるのほかありません」
姉鶴

「それが　わたし達の盃に注がれた運命の毒液なら　むしろ　すすんで　来世のための美酒として　ともに
飲みほしましょう」
サロルンチリ
「お姉さん」
二羽の鶴ひしと抱きあう
光　あでやかに　紅から青へと　うつろう
雪　降りしきる
吹きすさぶ地ふぶきが二羽の鶴を白く埋める
群唱団
「すきとおった寒さの薔薇が　おのれのまっしろい花びらをひきちぎって空にばらまくと　世界は　いたま
しい雪のシンフォニーだった
原野のひだめにつもった雪のまっしろい兎たちを　むごたらしい風の鞭が狩りたてると　宇宙は　ふぶきに
くれた
日が日を追いぬいて　時はすぎ　ついに　飛ぶ力を失なった姉鶴は　死を決意した」
蒼ざめた光の円光にぬれそぼる二羽の鶴
じりじりと包囲網をちじめるハシブト鴉の群
サロルンチリ
「(息たえだえに) 目がかすんで　もう　姉鶴もみえなくなった　神のさずけられた一生涯分の息は　まだ
吐きおえてはいないのに」
姉鶴

「（サロルンチリの腕をとって　よろよろと立ち）さあ　うたいましょう　サロルンチリ　わたしたちの　かりそめの出会いの　フィナーレを」

サロルンチリ

「（必死に立ち）幻の鳥よ　もう　舞って　あなたの世界に近づく術(スベ)もないけれど　せめて　愛する姉鶴との鳴きあいを　この世の舞いおさめに」

悲愴な音楽おこる

二羽の鶴　上半身のみの幽美な舞い

バリトン

「コー」

ソプラノ

「クワックワッ」

バリトン

「コー」

ソプラノ

「クワックワックワッ」

バリトン

「かなしやの」

ソプラノ

「地に息たえるは」

バリトン

「かなしやの」
ソプラノ
「鳥が空をうしなうは」
バリトン　ソプラノ
「死して　鴉のいのちとなり　あすの空に舞わん」
バリトン
「コー」
ソプラノ
「クワックワッ」
バリトン
「コー」
ソプラノ
「クワックワックワッ」
サロルンチリ　くず折れ　姉鶴がその上におおいかぶさる
はげしく鳴る不協和音
ハシブト鴉の群　姉鶴に襲いかかる
群唱団
「命の循環をとげるセレモニーのむごさよ……まだ息のある姉鶴の　肩を……背を……ハシブト嘴の飢えた
嘴が食いやぶる　しかし　それも終りだ　さっきの二羽の鶴のときならぬ鳴き合いをききつけて　原野の片
隅にかくれ住むアイヌの老人が駈けつけてくる」

アイヌの老人
「（駈けよって）さがれ　ハシブト鴉め」
ハシブト鴉の群　とびすさる
アイヌの老人
「（姉鶴を抱きおこし）鶴だ　丹頂鶴だ　しかし　かわいそうに！　絶命寸前じゃ」
姉鶴
「（瀕死の息で）弟を……サロルンチリを……（絶命）」
アイヌの老人
「そうか　死をもってかばったもう一羽の鶴は　弟か　血まみれの姉にくらべ　まだ　助かるみこみもあろう　息絶えた姉鶴の骸はいずれ土にかえるものならば　飢えたハシブト鴉の胃に葬むるのもまた天の慈悲
（姉鶴の骸を地におき　ひざまづいて祈り）さあ　ハシブト鴉ども　神のたまものであるこの鶴の骸は　おしいただいて食べるがいい　弟鶴の方は　わしの小屋につれかえり　手厚い介抱のうえ　ふたたび大空にかえしてやろう」
この間　ハシブト鴉の群　姉鶴をとりひしぎ　もち去る
アイヌの老人　サロルンチリを肩に　去る
暗転
やがて　地平から　曙の光　もえそめる
群唱団
「冬の寒さは厳しかったが　アイヌの老人の小屋は　炉に燃えさかるホダ木と　老人のいつくしみの心とであたたかかった　どんな高価な医薬もどんな名医の治療も及ばぬ老人の知恵ぶかい癒しの術（スベ）は　みるまにサ

ロルンチリを　もとのすこやかな体にもどして　ついに　寒さのゆるむ雪解けの季節がやってきた」
アイヌの老人の声
「さあ　飛び立つがいい　サロルンチリ　春の空を　エーテルとなって舞うがいい」
虹いろにあけそめる空
ひとり舞うサロルンチリ
うつくしい音楽鳴りわたる
合唱団
「ことほげよ
春
死の氷はとけ
命の水となって
せせらぎ
ながれ
大地をうるおし
うたう」
群舞団
手に手に花をかざし　野いっぱいに　サロルンチリをとりかこみ　歌い手の賛美にあわせて　サロルンチリを手でほめそやし　舞う
ソプラノ
「うつくしい舞い」

バリトン
「すばらしい舞い」
ソプラノ
「雲よりもかろく」
バリトン
「風よりもさやけく」
ソプラノ
「光よりもまばゆく」
バリトン
「舞うもの」
合唱団
「サロルンチリ……サロルンチリ……金目の鶴」
群舞団　なおもサロルンチリを追って華麗に舞うが　サロルンチリは　その手をのがれ　ひとり舞おうとする
群舞団
「(口々に) サロルンチリ　サロルンチリ　すばらしい舞い手　稀有の舞い手　なぜ　わたしたちのほめそやしからのがれようとするの？」
サロルンチリ
「(絶叫して) 幻の鳥が　ますますつよく　ぼくをよんでいるのだ」
サロルンチリ　去る
群舞団　追いすがって去る

暗転

群唱団

「悲しみの極限で　ついに　サロルンチリは　舞いが　体をあやつる術以上の　むしろ　おのれのすべてを空のうつろさにかえすこと　とさとったが　なおも　彼をよびつづける幻の鳥にこたえるべく　北の空へとび立った」

スポットの円光の中を舞いすすむサロルンチリ

群唱団

「やがて　眼下に　銀のしずくでいっぱいの湖水があらわれた

かつて　サロルンチリが　はじめて姉鶴と出会った　おもいでの湖だった

サロルンチリの為に命をすてた姉鶴へのいたましいおもいのまま　舞いおりたサロルンチリの目に　いちわの　うつくしい雌鶴がうつった」

べつの円孤あらわれ　雌鶴のウパス舞う

群唱団

「姉鶴のうまれかわりかとおもわれんばかりの雌鶴は　〝雪〟を意味するウパスとよばれたが　なぜかサロルンチリは　たじろいだ　ウパスをとうして姉鶴にいまもなお思い焦がれているおのれを発見したからだった」

やがて　二つの円光が一つに合体し　二羽の鶴　ステージいっぱいの光を浴びて舞う

歓喜の音楽おこる

バリトン

「コー」

ソプラノ
「クワックワッ」
バリトン
「コー」
ソプラノ
「クワックワックワッ」
バリトン
「いとしやの」
ソプラノ
「めぐりあいしは
バリトン
「祝えかし」
ソプラノ
「魅せられしもの」
バリトン　ソプラノ
「愛しあうもの」
バリトン
「コー」
ソプラノ
「クワックワッ」

バリトン
「コー」
ソプラノ
「クワックワックワッ」
二羽の鶴　ひしと抱きあう
突如　サロルンチリ　ウパスを突きはなし　虚空に手をのべ　すすみでる
サロルンチリ
「おお　幻の鳥！」
ウパス
「（サロルンチリにとりすがり）行かないで　サロルンチリ　幻の鳥など　どこにもいはしない　あなたは
いま　世界一の舞い手だわ　それ以上　なにを……」
サロルンチリ
「（泣いて　ウパスをふりはらい）断目なんだ　ウパス　幻の鳥のよぶ声で生涯の扉をひらいてしまったもの
には　幻の鳥の招きというはるかな回廊をただ進むのほかはない　さようなら　ウパス」
サロルンチリ　幻の鳥の招く方へとりょう手をのべ　ひとり　飛び立つ
ウパス
「（泣き伏し）サロルンチリ　いつまでも　ここで　あなたを待っているわ」
スポットの円光の中を　サロルンチリ　去る
べつの円光の底に坐し　手をサロルンチリの去った方向にのべたままのウパス
溶暗

群唱団
「ウパスを湖水のほとりにのこして　サロルンチリは　北へと　飛びたった　なおも　うつくしい舞いの世
界へとさし招く幻の鳥にひきよせられて――」
スポットの円光の中を舞いとぶサロルンチリ
群唱団
「荒れさわぐ海は　狼だった
波は　するどい牙のそそりたちだった
しかし
サロルンチリは　はばたく
北へ

島々は　暗黒のうみおとした岩だった
断崖は　光への絶望をうたうノドだった
しかし
サロルンチリは　はばたく
北へ

海霧（ガス）のカーテンが　ゆくてをはばみ
飢えが　つばさをたわめ
寒さが　魂をこごらせた

（一〇二）

しかし
サロルンチリは　はばたく
北へ」
やがて　地平に　極光の兆がもえる
極美の音楽わきおこる
群唱団
「ついにサロルンチリが　北のさいはてに到りつく日がやってきた……華麗なオーロラーの舞いしきる日が」
空いっぱいに舞いしきるオーロラー
茫然と立ちつくすサロルンチリ
幻の鳥
「（エコーで）さあ　おいで　サロルンチリ……うつくしい舞いの世界へ」
サロルンチリ　声の方へと　手をのべる
やがて　空いっぱいのオーロラが　いちわのすきとおった鶴の姿をかりて　舞う
サロルンチリ
「おお　幻の鳥！」
サロルンチリが近づくと　幻の鳥は遠のき　虚空をつかんでさ迷うばかりのサロルンチリ
サロルンチリ
「おお　幻の鳥！……あなたは　どこに？」
幻の鳥
「（エコーで）いつも　おまえのすぐそばに……」

（一〇三）

サロルンチリ
「えっ　いつも　わたしのすぐそばに？」
幻の鳥
「（エコーで）さらば　サロルンチリ　わたしは　いつも　おまえのすぐそばにいる」
サロルンチリ
「（声を追って走り）ぼくをみすてないで！」
音楽たかまり
空いっぱいにオーロラとなって舞う幻の鳥
やがて　音楽ひくくなり　幻の鳥の姿もついえ　オーロラーの光も　いつしかとけさる
沈黙
サロルンチリ
「（絶叫して）消えた……幻の鳥が　姿ばかりが　声までも　おお　もはや　招く声をもたないぼくは　どうやって生きていけばいいのか（泣く）」
暗転
群唱団
「光とは　パチパチと音たてて燃える闇の薪か……では　闇の薪がボウボウと燃え　ついに　燃えつきればわれらの世界から闇はすっかり姿を消すか　いやいやどうして　燃えつきた闇の灰から　もっとしつこい闇がパッと花ひらいて　世界はいっそうくらくなる
サロルンチリよ　絶望も　また　燃えつきのいい闇の薪……ヒュウヒュウと焔をあげて燃えさかれば　ほむらの中心で　希望の光が目をさますだろう」

スポットの円光を　くるしげに舞いとぶサロルンチリ
群唱団
「生れた瞬間からサロルンチリをみちびきつづけた幻の鳥の声がハタとやみ　おそろしい沈黙が襲ってきた
空のたかみへといざなう引綱とも　地上にしっかとゆわえるもやい綱ともいえる凧の糸がプツリと切れ　凧
は　虚空を　くるくると　狂いまわるばかり　おお　あわれなサロルンチリ」
真紅の光はげしく旋回する
不協和音乱れ鳴る
サロルンチリ
「(身悶えて舞いつつ)ぼくのすぐそばには　だれもいない　ぼくは　ひとりだ　ひとりぼっちの闇だ」
群唱団
「北のさいはてから南へとサロルンチリは　おのれを　木の葉のように吹きはらった」
真紅の太陽　世界をぐれんの焔で焼く
群唱団
「極熱の空を　つばさも燃えつきよと　とんだ
しかし　厳しい試練に耐えぬいたサロルンチリの体は　しらずしらず太陽の吐きだす猛火をすすりとって
芳醇な血のしたたりにかえてしまった」
暴風雨吹きすさぶ
はげしい稲妻と雷鳴はためく
それをかいくぐって飛ぶサロルンチリ
群唱団

「南へ……南へ……サロルンチリは飛んだ
暴風雨の手がサロルンチリを鷲づかんで引き裂こうとしたが　しらずしらず　それを愛撫の手にかえて　全身を快よくさすらせる術がサロルンチリにはそなわっていた」
雪が降りしきる
まばゆい光と全盲の闇が　入れかわりたちかわりサロルンチリを襲う
しかし　なおもあえぎ飛ぶサロルンチリ
溶暗
群唱団
「むすうの太陽が　光の冠をふるわしてあらわれ　むすうの月が　闇の従僕をひそかにひきつれて立ち去ったが　なおも　サロルンチリは　南へ　南へと　飛んだ
そして　ついに　極熱の世界が　ふたたび　極寒の世界をよびさまし　サロルンチリは身も凍る南のさいはてに到り着いた……あでやかなオーロラーの舞う国に」
地平にオーロラーの光さしそめる
うつくしい音楽おこる
やがて　空いっぱいにオーロラーが舞う
その中心に　ウパスの透明な幻があらわれる
サロルンチリ
「(叫んで)おおウパス」
サロルンチリと幻のウパス　オーロラの中で幻想的に舞う
溶暗

音楽ついえさる
スポットの円光にひとり残されるサロルンチリ
サロルンチリ
「(狂喜して) ウパスだったのか……ぼくのすぐそばにいたのは　おお　ウパス　おまえとの愛こそが　ぼくのうつくしい舞いの世界だったのか」
サロルンチリ　勇んで舞いたつ
群唱団
「愛は　不意の客……サロルンチリは　矢のように　ウパスのいる北へと　飛んだ
ふたたび　むすうの太陽の竈の口から入って煙突へとぬけ　むすうの月のナイフの刃をわたって背へととび
極寒のダイヤモンドの檻をくぐりぬけては　極熱の薔薇の花びらをふみわけ　サロルンチリは　一散に　北へと飛んだ
そして　ついに　めざす湖水のほとりに辿りついたのは　すでに　ものみな凍てつく冬だった」
降りしきる雪
淡い光の乱舞
立ちすくむウパス　襲いかかるキタキツネに必死にあらがう
サロルンチリ
「(キタキツネを追いはらい) 飢えて血迷ったな　キタキツネ奴　ぼくからウパスを奪うのは　おまえがおまえからおまえの命を奪うのとおなじ　さあ　うせろ　原野のコソ泥奴」
キタキツネ　去る
ウパス

(一〇七)

「（抱きついて）サロルンチリ！」
サロルンチリ
「（抱きしめて）ウパス！　おお　かわいそうに……愛は憐憫の芽から育つというが　それは　愛が　相手の
鏡にじぶんの姿をはっきりとうつしみるからだ　おお　ウパス　氷った湖のほとりで　永遠に来ないかもし
れないぼくを待って　危うくキタキツネの餌食になりかけたおまえは　しかし　じつは　冬の寒さよりはゆ
くえしれずのぼくへの心配に凍えていたのだから　それを　熱い愛撫でとかし　愛のせせらぎにかえすのは
ぼくのつとめ　おお　ウパス」
いつくしみの音楽おこる
空に歓喜の光もえる
合唱団
「愛は
春
どんな氷もとかす
愛は
熱
どんな冬をもうちまかす
愛は
力」
祝祭の音楽たかまり
野の春の光が爆発する

（一〇八）

サロルンチリ　華やいで舞う
群舞団　手に手に花をかざしてあらわれ　サロルンチリとウパスをかこみ　唄い手の賛美にあわせて　サロルンチリをりょう手でほめそやし　舞う
ソプラノ
「うつくしい舞い」
バリトン
「悲しみのながい夜も　曙のうつくしさで　むくわれた」
ソプラノ
「ウパスへの愛にめざめて　舞いは　なしとげられた」
バリトン
「ウパスへの　愛にめざめて　うつくしい舞いの世界は　ひらかれた」
ソプラノ
「命と命の愛しあいを　舞う……」
バリトン
「おお　サロルンチリ」
ソプラノ
「おお　サロルンチリ」
合唱団
「サロルンチリ　サロルンチリ　奇蹟の鶴」
サロルンチリ

「（ウパスの手をとり）さあ舞おうよ　ウパス」
ウパス
「（はじらって）鶴のみか　空飛ぶすべての鳥……浮かぶ雲……芽ぶく草……ほころびる花……吹きめぐる風
までが　あなたの舞いにみとれ　ほめそやしているというのに？」
サロルンチリ
「ウパス　おまえあってのぼくの舞い」
ウパス
「うれしいわ　サロルンチリ」
二羽の鶴　舞う
群舞団　二羽をかこんで華麗に舞う
バリトン
「コー」
ソプラノ
「クワックワッ」
バリトン
「コー」
ソプラノ
「クワックワックワッ」
バリトン
「よろこべよ」

ソプラノ
「雄鶴と雌鶴の結婚を」
バリトン
「祝福せよ」
ソプラン
「命と命のまぐわいを」
バリトン
「コー」
ソプラノ
「クワックワッ」
バリトン
「コー」
ソプラノ
「クワックワックワッ」
音楽ついえ
溶暗
群唱団
「空と海がただ一本の水平線を結びあうようにサロルンチリとウパスは　固く結ばれた
やがてキタヨシの新芽が萌える春の湿原に　彼らは　愛の巣をしつらえ　卵を抱き
ヒナをかえし　日々のくらしの空を　しずかに　うつくしく舞った」

（一一一）

溶明

ゆるやかに舞うサロルンチリ　ウパス　ヒナ鶴

不気味な音楽　はじめは地鳴りのように低く　しだいに高鳴る

地平に真紅の火が映えそめ　しだいに中天を焼く

群唱団

「野火だ！　火が　湿原を焼く　サロルンチリ　気をつけるがいい　おまえの愛する妻ウパスは　折悪しく
羽根のぬけかわりの時をむかえ　いまは　飛べない身ではないか」

サロルンチリ

「（ウパスとヒナを抱きしめ）野火の脚には　疾風（ハヤテ）の蹄がついている　はや　ぐるりは　火と煙にかこまれ
逃れる道は　空だけだ」

ウパス

「（必死に）わたしとヒナをいっしょに運ぶのは無理よ
さあサロルンチリ　まず　ヒナ鶴を　安全な場所に！」

サロルンチリ

「ウパス！」

ウパス

「火はもうすぐそこ　大気の鏡はアカアカと猛火の熱を反射する　さあ　はやく　サロルンチリ！」

サロルンチリ

「（ウパスを抱き）ウパス　すぐ戻ってくるぞ」

サロルンチリ　ヒナ鶴を抱き　猛火の環をくぐって飛びさる

（一一二）

野火はついに巨大な真紅の口をあけ　ウパスをのみほす
サロルンチリ
「（ヒナをおいて戻るが火勢におされて近づけず　狂ったように舞い）ウパス　ウパス　ウパス」
やがて火勢劣え　音楽もしずまり　いつしか沈黙
溶暗
群唱団
「われらは　なぜ　うまれ　生き　愛し　死ぬのか　野火に焼かれて　ウパスは　雪のようにしろい灰にかえったが　それも　土の養分となって大地をこやし　かずしれぬうつくしい花々を咲かせるためか
一方　すくいだされて　丘の草むらにかくまわれたヒナ鶴も　サロルンチリの飛びたったすきにエゾイタチに襲われて息絶え　サロルンチリは　孤独の鶴にかえった」
スポットの円光をかなしく舞うサロルンチリ
レクイエムの音楽鳴りわたる
空いっぱいに降りしきるかなしみの光
群舞団　サロルンチリをかこみ　悲しみの舞い
ソプラノ
「愛するものをうしなって」
バリトン
「孤独の扉がまた　ひらく」
ソプラノ
「悲しみのきわみで」

（一一三）

バリトン
「うつくしい舞いの世界がひらく」
ソプラノ
「美の極限は　死」
バリトン
「そして　死は　あらたな命の子宮」
ソプラノ
「舞え　サロルンチリ」
バリトン
「命のはてを」
ソプラノ
「舞え　サロルンチリ」
音楽ついえ
溶暗
群唱団
「不意にサロルンチリは　おのれの内部の空に　オーロラーの光を浴びて舞う幻の鳥をみた
すべてを失って　いま　サロルンチリは　すべてを得た
なんということか
彼は　もはや　飢えることがなかったので　餌をついばむ必要がなかった
もはや　渇くことがなかったので　水をすする必要もなかった

ただ　雲のように　純粋に　湿原の空を舞った」
スポットの円光の中を　かそけく舞うサロルンチリ
音楽かすかに鳴りわたる
サロルンチリ
「いまは　舞え
ぼくがむさぼり食べた妹よ
いまは　舞え
ぼくをオジロ鷲からすくうために命をすてた父よ
いまは　舞え
ぼくの身がわりとなって密猟者の銃弾に倒れた母よ
いまは　舞え
ぼくをかばってハシブト鴉の餌食となった姉よ
いまは　舞え
ぼくを野火からのがれさせた妻よ　子よ
いまは　舞え
蝶よ　魚よ　鳥よ　雪よ　世界よ
ぼくを舞え
おお　いま　ぼくは
幻の鳥
うつくしい舞い」

（一一五）

原子　修

吹きすさぶ風
ふりしきる雪
べつのスポットの円光に　キタキツネあらわれ　サロルンチリをうかがって　ゆるやかに舞う
群唱団
「冬がきた
ついに　サロルンチリは　肉体をすら
必要とはしなかった
いつ層輝きわたるおのれの内部の空を
いままでになくうつくしく舞うサロルンチリには
もはや
つばさも　尾羽根も　脚も　頭にくっきりと朱をともす丹頂の火すら　必要とはしなかった」
地平に萌えそめるオーロラの光
合唱団のハミング　かすかにひびく
群唱団
「かつて　姉と出会い　妻とむすばれた北の湖水も
いまは
白一色の氷湖だった
そのほとりに
ひとりたたずみ
サロルンチリは

（一一六）

すでに
肉体を超えた魂の舞いへと入った」
キタキツネ　しずかに　サロルンチリに迫る
群唱団
「やがて
大自然の法則にしたがって
飢えたキタキツネが
牙を鳴らして近づいたが
それすらが
サロルンチリには
宇宙を支配する生と死のまばゆい循環の環の輝きにみえ
いまは
湿原も凍てついた湖も　降りしきる雪も　まっしろい大地も　そして　息をひそめて春を待つ草も　木も
虫も　鳥も　けものもが　サロルンチリの　宇宙そのものへとかえっていく宏大な肉体の中にとけ入って
しずかにほほえみ
サロルンチリは
ますます迫りくるキタキツネの
まあたらしい命の門のようにひらかれた
薔薇いろの口へと
ゆっくり

（一一七）

おのれをはこんでいった」
逆光で立ちはだかるキタキツネの足もとにすすみより　倒れ伏すサロルンチリ
合唱団のハミングたかまる
オーロラの光　いつ層はげしく降りしきり
ついに
空いっぱいにすきとおった幻の鳥の舞いを描く
合唱団
「おお
サロルンチリ
金いろの目をとじた瞬間
幻の鳥となって
うつくしい舞いの世界にかえった
いちわの　丹頂鶴」
音楽きわまって

幕